

前号を読んで

## 世界に通じる学生を育てるための戦略を支援する

堀越 勝

人間総合科学研究科講師

筑波フォーラム 68号、特集「世界に通じる学生を育てるための戦略」を読んで思い出したことがあった。昨年の11月、カルフォルニア大学バークレー校（以下、バークレー）の学生相談所所長、プリンス博士と会う機会があった。バークレーは昨年英国の新聞が発表した大学世界ランキングにおいて、1位のハーバード大学に次いで2位にリストされている文字通り世界に通じる学生を育てている大学の代表格である。その大学の学生相談所の所長との会話の中で気付かされたことについて述べることにする。まず、世界に通じる大学には世界に言葉が通じる学生が多い。バークレーでは学生の39%がアジア系、32%が白人、11.7%がラテン系と学生の構成がすでに国際的である。今年の新入生の65%は少なくとも片親が米國生まれではなく、50%は家庭で英語以外が話されていると報告されている。つまり、学生の約半数は英語以外を話せるバイリン

ガルで、それだけでも、世界に通じる学生の予備軍が豊富に潜在していることになる。

次に、学生と教員を支援するシステムが充実している。世界に通じる学生は新しい知識や技術の増加だけで作られるのではない。バークレーは筑波大学と同サイズではあるが、学生相談所スタッフの数は筑波の約12倍とその差は大きい。米国における大学の学生相談所は単に生徒の相談を受けるだけの場所ではなく、様々なグループ活動やプログラムを展開する資源センターである。そこには積極性を育てる訓練等、学生の資質向上のためのプログラムも多数用意されている。さらに、教員のためにも学生を効果的に育てるノウハウの提供等が行われている。つまり、新しいプログラムを新しい体質の教員が教えられるように、教員側の援助や改善にも学生相談所が積極的に関わっているのである。しかし、それだけの専門スタッフをどうすれば確保できるのだろうか。一つの方法は学生相談所をカウンセラー志望の院生の訓練センターとすることで、訓練を提供する代わりに安価でマンパワーを獲得している。

前号を読んで、世界に通じる学生を育てるためには、バークレーのように、学生と教員の両方を支えるシステムの構築も重要なのではないかと思われた。

（ほりこし まさる／臨床心理学）